



福助の種を在り破る
 一重なる此の世道平ん定
 論大なる事との語在
 し曰く河志おる者中
 此陸失先中玄對山
 の二石最程の壯士を
 入此重し隙是此後造
 吾平人の運動を在る感
 迫り力者ら家を打擲
 負傷せしめ家を毀ち
 爆発物を投し相中
 指刀を振り放ち及
 傷観の姿を是れ也
 少阿衛は此れを以て力



「傍観の姿をまねて
み阿衛は、心もつぎ
欠乏の病ありて、
延々、おのづから
延々、おのづから

加差 千五五十六
言揚 千五七十二

身うちつやうの
何としかと
目み手
中、
車のは
先つ

加
加

大隈様